

芸術でつながる、
広がる、
支え合う



ricca / りっか
沖縄県障害者芸術文化活動支援センター

「令和6年度沖縄県障害者芸術文化活動支援事業」 報告書

INDEX

事業概要	03
センター紹介	04
イベントレポート	06
アーティスト紹介	16
- case01 玉城 愛子さん	18
- case02 洋介さん	20
- case03 平田さん	22
- case04 金城 裕之さん	24
- case05 宮平 康生さん	26
- case06 大城 正雄さん	28
掲載申し込み・ご相談・お問い合わせ	30

厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業



厚生労働省 障害者芸術文化活動普及支援事業

障害者芸術文化活動普及支援事業は、障害のある人が芸術文化にふれ、楽しみ、深めることができる社会づくりを推進する中間支援事業です。全国に「障害者芸術文化活動支援センター」を置き、障害者による芸術文化活動の支援を行っています。



全国の障害者芸術文化活動普及支援事業

障害者の芸術文化活動に対して、より身近な拠点で支援が受けられるよう47都道府県に支援センター設置を目指しています。また、支援センターが設置されていない地域の方や支援センターをサポートするため「ブロック」、「全国」という活動エリアを設け、広域センターと全国連携事務局を設置しています。

■ 2024（令和6）年度 実施都道府県

〈北海道・北東北ブロック〉 広域センター 北海道に設置 支援センター 北海道・青森県・岩手県	〈近畿ブロック〉 広域センター 奈良県に設置 支援センター 滋賀県・京都府・大阪府・兵庫県・奈良県・和歌山県
〈南東北・北関東ブロック〉 広域センター 宮城県に設置 支援センター 宮城県・山形県・福島県・茨城県・栃木県・群馬県	〈中国・四国ブロック〉 広域センター 高知県に設置 支援センター 鳥取県・島根県・岡山県・広島県・徳島県・香川県・愛媛県・高知県
〈南関東・甲信ブロック〉 広域センター 埼玉県に設置 支援センター 埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・山梨県・長野県	〈九州ブロック〉 広域センター 福岡県に設置 支援センター 福岡県・佐賀県・長崎県・熊本県・大分県・宮崎県・鹿児島県・沖縄県
〈東海・北陸ブロック〉 広域センター 新潟県に設置 支援センター 新潟県・富山県・石川県・福井県・岐阜県・静岡県・愛知県・三重県	〈全国〉 連携事務局

厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業 WEBサイト (<https://arts.mhlw.go.jp/>) より引用

都道府県における活動支援

芸術文化活動を行う障害者本人やその家族、障害福祉サービス事業所、文化施設、支援団体等（以下「事業所等」）を支援する拠点「障害者芸術文化活動支援センター」（以下「支援センター」）を都道府県が設置します。事業の実施は、都道府県または都道府県が認めた団体が行い、主に以下の事業に取り組みます。

- ・ 都道府県内における事業所等に対する相談支援
- ・ 芸術文化活動を支援する人材の育成等
- ・ 関係者のネットワークづくり
- ・ 発表等の機会の確保
- ・ 情報収集・発信

厚生労働省障害者芸術文化活動普及支援事業についてはWEBサイトを
ご覧ください。
<https://arts.mhlw.go.jp/>



センター紹介

芸術でつながる、 広がる、 支え合う

沖縄県障害者芸術文化活動支援センターは、県内在住の障害のある方々やそのご家族、支援団体を対象に、芸術文化活動をサポートする拠点です。障害のある方々が自分らしさを大切にし、創造的な文化芸術活動を楽しみ、社会とのつながりを育むための取り組みを支援します。さらに、障害者の芸術活動を広め、その充実を図ることを通じて、社会全体の理解を深めるとともに、障害のある方々の自立と社会参加を促進することを目指しています。

PROJECT

関係者のネットワークづくり

障害者の芸術文化活動を支える人々が連携し、より良い支援ができるよう、関係者のネットワークを構築します。障害者やその家族、専門家、文化施設や事業所の職員、行政・教育関係者などと協力し、必要な協力を得るなどの取り組みを行います。

相談支援

障害のある方、障害のある方の活動を支援する方などに、芸術文化活動における支援方法、創作環境整備、権利保護、作品販売等に関する相談を受け付け、関係機関や専門家の紹介や専門的知見によるアドバイス、情報提供を行います。まずはお気軽にご連絡ください。

支援する人材の育成

文化・福祉・教育など多分野の関係者が芸術文化活動を支援できるよう、研修や現場体験プログラムを実施します。支援の方法や著作権、障害特性の理解を深め、各分野をつなぐ人材の育成に取り組みます。

参加・表現の機会を創出

障害者の活躍の場を拡げ、表現の多様性と魅力を伝えていくために、地域住民をはじめ多様な人々との交流に配慮しながら展示会、公演、体験、鑑賞などのさまざまな形で参加できる機会をつくって行きます。

情報収集・発信

県内の展示や公演などのイベント情報、芸術文化活動の実態、作品や作家の情報を収集・発信します。また、全国広域センター及び九州ブロック連携事務局と連携し、国内外の最新情報を収集・活用します。障害者本人にも情報が届くよう工夫します。

アーティスト紹介

アーティスト一人ひとりの創造的な表現と活動を広く発信し、多くの方にその魅力を届けることを目的として、沖縄県内の障害のあるアーティストのプロフィールや作品をWEBサイトで紹介しています。掲載を希望される方はWEBサイトにて随時受付中です。

〈アーティスト紹介〉
<https://riccart.jp/artist/>



〈アーティスト掲載申し込み〉
<https://riccart.jp/request/>



WEBサイト掲載例

ストーリーズ紹介

沖縄県内の障害のあるアーティストを訪問し、インタビューを行った記事をWEBサイトで紹介しています。作品づくりを始めたきっかけや、創作へのこだわり、背景など、作家それぞれの想いや魅力に触れていただける内容です。令和6年度に実施した取材内容については、本冊子の16～29ページでもご覧いただけます。



〈ストーリーズ紹介〉



<https://riccart.jp/stories/>



イベントレポート

『障害のある人たちの芸術活動のこれからを考える』

日時：2025年3月22日(土)13:30～17:00

場所：おきなわ工芸の杜 多目的室(沖縄県豊見城市豊見城114番地1)

セミナー参加対象：福祉／文化芸術／教育関係者、障害のある人の芸術活動に興味のある方

参加料：参加無料、オンライン参加可能

同時開催：わったーアート展(おきなわ工芸の杜 エントランスホール)

主催：ricca(沖縄県障害者芸術文化活動支援センター)、九州障害者アートサポートセンター

助成：令和6年度 障害者芸術文化活動普及支援事業

2025年3月22日(土)、おきなわ工芸の杜 多目的室にて、セミナー「障害のある人たちの芸術活動のこれからを考える」が開催されました。また、沖縄県内の福祉事業所利用者の作品展「わったーアート展」も、セミナー会場前にて同時開催。

セミナーには、福祉や文化芸術、教育、障がいのある人たちの芸術活動に関心のある方など、沖縄県内外を問わず、およそ100名ほどが対面・オンラインで参加。これまでの沖縄県での取り組みや、2025年1月に設立された、沖縄県障害者芸術活動文化活動支援センター「ricca/リッカ」の概要、日本各地での先駆的な事例の紹介、登壇者によるトークセッションに加えて参加者との質疑応答・意見交換の場が設けられました。

1. 沖縄県で行われているアート活動は？ 県内事業所の取り組み

まずは、沖縄県内の3つの施設での取り組みについて、各施設より紹介がありました。

「“彼ら”のアートを真ん中に 人と人をつなぐ」 社会福祉法人大樹会



社会福祉法人大樹会の西村夏生(にしむらなつき)さん(以下、西村さん)は、事業所内で展開している「atelier(アトリエ)くわの実」(以下、アトリエ)の活動と、利用者の変化を紹介しました。

アトリエのコンセプトは「“彼ら”のアートを真ん中に人と人をつなぐ」。作品を通して利用者のことを知ってもらうため、アトリエではカレンダーなどのグッズの制作・販売や原画の展示会を行っています。

グッズの販売では、利用者が自身の作品を知ってもらい、対価としてお金を稼ぐことを体感したり、「自分たちがやっていることに意味がある」と思えるきっかけになっていると、西村さんは話します。そして、沖縄県立博物館・美術館のギャラリーでの展示は、利用者に喜ばれ、彼らの自信にもつながったそう。

制作経験がまったくない利用者には戸惑いがありました。でも、利用者は段々と自主的になっていったそうです。中には職員を困らせていた利用者もいたそうですが、自分の手を使って作品をつくり、その作品が家族に喜ばれる経験をする中で、またつくりたくなる。そんな流れが生まれるようになりました。

ほかにアトリエで意識しているのが「障害のある方達

を障害があるように見せないこと」。

沖縄県立博物館・美術館のギャラリーでは、来場者から「障害がある人の作品だと思わなかった」という感想を受け取ったことがありました。そんな経験から、西村さんは「作品を通して利用者を知ってもらうことを大事にしてきて良かったと思える展示会だった」と沖縄県立博物館・美術館のギャラリーでの展示を振り返りました。

西村さんは「社会における障害の概念を変えるようなアート活動をしていきたい」と締めくくりました。

「人×ものづくり」 輝翔福祉会



輝翔福祉会の我喜屋聖子(がきやししょうこ)さん(以下、我喜屋さん)は、就労継続支援B型の事業所「セルフサポートセンターぴゅあ」(以下、ぴゅあ)に所属しています。

ぴゅあで大切にしているのは、利用者ができることを、ものづくりや仕事につなげていくこと。我喜屋さんは「人×ものづくり」をテーマに、ぴゅあでの創作活動と陶芸体験の事例を紹介しました。

まず、「人×ものづくり＝やりがい」として、就労支援の陶芸班と畑班で活動している2名の例が挙げられました。

2名のうち1名は、陶芸班で活動しています。以前は、休みがちだったり、怒りっぽかったり、他の人とのトラブルを起こしたりすることもありました。しかし今では、こうしたトラブルはなくなり、さらには好きな車だけではなく、食器づくりにも積極的に挑戦するようになっています。

もう1名は、普段は畑班で活動していますが、雨の日の屋内活動をきっかけに陶芸作品への絵付けを始めました。遠慮がちだけど、本当は絵を描くのが好き。かつて

は自信なさげな様子でしたが、今では自信を持って、楽しみながら作業に取り組んでいるとのこと。

2名とも、最初は作品を褒められても「他の人に比べたら、自分の作品は遊び」「自分の絵は落書きだから」と受け入れていませんでした。それでも、自身の作品が売れる経験や、作品が喜ばれる経験を重ねるうちに自信が持てるようになっていったといいます。

さらに「人×ものづくり＝出会い」として、陶芸体験の実施についても紹介がありました。

次に、陶芸体験では、職員が近くにいるものの、利用者が体験者に作り方を細かく教えます。これまでに、保育園や小学校、フリースクールで実施されてきました。

利用者が普段接する人は、家族と施設内の人だけ。人と関わることが得意な人もいれば、苦手な人もいます。苦手な人でも、子どもと関わることで人と関わることに慣れていったり、人と関わる楽しみを見つけたりすることができる——陶芸体験は、利用者にとって新しい自分を見つける機会になっているそう。

我喜屋さんは最後に「知らない」ことが、大きなバリアになっている意識があることから、障害のある人とそうでない人が「隣人として、もっとお互いを知って、同じ時間を共有する機会が増えるといい」と今後の希望を話しました。

「生き甲斐のある生涯を支援する！」

トゥムヌイ福祉会



トゥムヌイ福祉会の楚山佳助(そやまけいすけ)さん(以下、楚山さん)、照屋有紗(てるやありさ)さん(以下、照屋さん)は、「生き甲斐」を軸に、法人の成り立ちから伝統工芸品作りに至った経緯や、アート活動の取り組みについて紹介しました。

トゥムヌイ福祉会において「生き甲斐のある生涯を支援する！」は法人の理念。

複数ある事業所の1つである、インバウンド客を対象とした焼肉屋さんでは、平均工賃が5万円程度と、B型事業所の中では高い工賃を得られる事業所となっています。

そこにたどり着く過程で「生き甲斐とは、工賃という金銭的な対価を得られることだけではない。他者との関わり

や自己表現、自己実現など、十人十色の生き甲斐・幸福追求の形があることを改めて認識できた」と、楚山さん。

他にも、紙粘土が得意な利用者がいたことをきっかけに「マイノリティからマイスターへ」をテーマにした銀細工アクセサリーの製造販売につながったという事例も紹介されました。

さらに、トゥムヌイ福祉会では、沖縄県立芸術大学出身の支援員が入社したことで、美術館での作品の展示や商品開発へと活動の幅が広がっていきます。



制作した商品は、自治体のイベントや生協、フリーマーケットサイトなどを通じて販売されました。

イベント出店は、利用者と地域の方々との新たな交流の機会になったそう。

トゥムヌイ福祉会では、2025年、新しい事業所がオープンします。その名も「アートコネクト米須コースト」。アート活動自体を事業所でのメイン事業とします。

照屋さんは、新しい事業所について「アート活動を通じて、利用者さん1人1人の個性や魅力を最大限に引き出し、地域の方や観光客の方とも交流を持てる活動拠点にしていきたい」と今後の展望を紹介しました。

2.「ricca(りっか)」ってどんなところ？「ricca」の活動紹介



2025年1月に設立された、沖縄県障害者芸術活動文化活動支援センター「ricca／りっか」(以下、センター)。その活動について、トゥムヌイ福祉会代表でもある、センター代表の喜納平さん(以下、喜納さん)が説明しました。

2017年よりスタートした、厚生労働省の「障害者芸

術文化活動普及支援事業」により、各都道府県に障害者芸術文化活動センターが順次設立されています。

センター名の「ricca」は「Ryukyu Islands Creative Culture and Arts」の頭文字から名付けられましたが、そこには、沖縄の方言「りっか」の「一緒にやろう！」という意味が込められています。

沖縄県が掲げるセンター設立の目的は、障害者の芸術文化活動の普及及び充実を図ることにより、障害者の自立と社会参加を促進することです。

喜納さんは、沖縄県の目的を踏まえながら、センターでは「アートをベースにした生きがい探し」をしたいと考えています。さらに、沖縄固有の風土や歴史、伝統を重視している沖縄県立芸術大学とも連携することで、センターにおける「沖縄らしさってなんだろう？」を探究していきたいと意気込みを語りました。

riccaは中間支援プラットフォームとして、次の5つを行います。

- ①ネットワークづくり
- ②相談支援
- ③人材育成
- ④芸術文化活動の機会創出
- ⑤情報収集・発信

例えば、発信という意味では、展示はもちろん、WEB上でも絵画や音楽・舞台芸術の作家さんの紹介を行う予定です。また、音楽や美術のワークショップの企画や、北部、離島へのアプローチも検討されています。

事前のアンケートから、利用者が制作した作品が展示されているのは施設の中が多いことがわかりました。また、施設や利用者のニーズとして「感想を受け取ること」がありますが、一つひとつの感想は利用者のモチベーションにつながっていくものです。

このように、発表の場所作りが必要とされていることは、明らかです。

喜納さんは、今後のセンターの活動について「セミナー参加者のみんなとつながり、意見をもらいながら、みんなと一緒にセンターを作っていきたい」と、参加者にメッセージを伝えました。

3. 沖縄県立芸術大学における、「障害者と芸術文化」の教育研究のこれから

沖縄県立芸術大学(以下、県芸)音楽学部音楽文化専攻の谷本裕(たにもとゆたか)さん(以下、谷本さん)は、同大学におけるアートマネジメント教育での「障害者文化芸術活動」の現状について話しました。

大学で教鞭を取る前は、コンサートホールでマネージャーとして働いていた谷本さん。あるクラシック音楽のコンサート中のこと。大きな声を出していたお客さん

にやむを得ず退室をお願いすることがありました。入場料を受け取っている手前、大変申し訳なかったと谷本さんは感じていました。



また、クラシックのコンサートが好きだった谷本さんのお父さんとの思い出もあります。高齢になったお父さんの介護をしていた時、コンサートホールに連れて行ったことがありました。ところが、プログラムの半分もいかないうちに、お父さんは帰りたくなったそう。お父さん自身がトイレが近かったことをはじめ、劇場の何かが原因だったようです。谷本さんは劇場がお年寄りにとってあまり居心地が良くないのではないかと考えました。

谷本さんは、このような自身の劇場に関する経験から「クラシック音楽のコンサートにお客さんが入らないのはなぜだろう」という疑問を抱いていました。この問いが「ビッグ・アイ」のプログラム(後編で詳しく紹介)を知り、「これまでの劇場は開かれたものになっていなかったのではないか」という仮説をもつことにつながっていきます。

谷本さんは、学生に対しても「演者側ではない人たちに受け入れられる努力をしているか」と問いを投げかけています。

現在、県芸では福祉に関連したアートマネジメントの授業はありません。ただ、学生が障害のある人の音楽団体と一緒に活動をしたり、社会福祉施設でインターシップを経験したりしています。

そんな中、2025年4月より新しい動きがあるそうです。県芸内の「全学教育センター」で、芸術と障害の関係などをテーマに芸術文化の力で社会的な課題解決を考える研究が始動します。この研究は、文献や視察、ディスカッションなどを通して、芸術大学の一般教養教育としてどんな科目を提供していくべきかを考えることまでを視野に入れ行われていく予定とのこと。

「気づきがなければ、障害のある人ができないことに気づくことができない。教員として、気づきを与えなければいけない」と谷本さんは語ります。

最後に、riccaが行おうとしている「人材教育」について、大学関係者や一般の人の考えを変えていく役割があること、そして、谷本さん自身も「仲間だと思っている」と熱く宣言しました。

わったーアート展

セミナー会場前では、障害のある人のアート作品の展示が行われました。
 タイトルの「わったー」は沖縄の言葉で「私たちの」を意味します。
 作品は、沖縄県内計4か所の福祉事業所から出品。
 絵画、ぬいぐるみ、銀細工、刺繍、陶芸、靴にデザインが施された作品など、およそ30名の作品が並びました。
 セミナーの前後に、作品をじっくりと鑑賞する来場者が多く見られました。



4. 先進事例紹介

沖縄県内の事業所での取り組みや、沖縄県障害者芸術活動文化活動支援センター「ricca/リッカ」（以下、センター）の説明の後は、先進事例として、奈良県と大阪府の施設より活動事例の紹介がありました。

「障害のある人がアート活動に取り組む3つの意味」 一般財団法人たんぼの家（奈良県）



岡部太郎（おかべたろう）さん（以下、岡部さん）は、一般財団法人たんぼの家（以下、たんぼの家）でのアート活動や支援活動について紹介しました。

岡部さんは、東京の美術大学に在学中、休学してたんぼの家で1年間のインターンを経験。大学を卒業後にそのままたんぼの家に就職し、20年以上が経つそう。たんぼの家は50年以上活動を続けています。特に、重度の脳性麻痺がある利用者がやりたいこと、やっけて心地のいいことを追求してきました。その結果、利用者にとってアート活動が非常に合っていたとのこと。

岡部さんは、障害のある人がアート活動に取り組む3つの意味を紹介しました。

1つ目は「アートを通して、他者とつながる機会と、成長するきっかけをつくる」こと。アート活動を通して人とのつながりが生まれます。また、企業や行政から対価をもらい、テーマのある中で悩みながら作品をつくり上げることが成長の機会となります。

2つ目は「アートを通して、人や社会の見方を変える」ことです。岡部さんは「見方を変えれば、その人の行為を問題行動としてではなく、存在することの価値として捉えることができる」と続けます。利用者の一人に薬のカラを集める方がいました。家族が困るほどたくさんありましたが、それを使った作品は美術館職員が「見たことがない」という理由で韓国の美術館で展示されました。

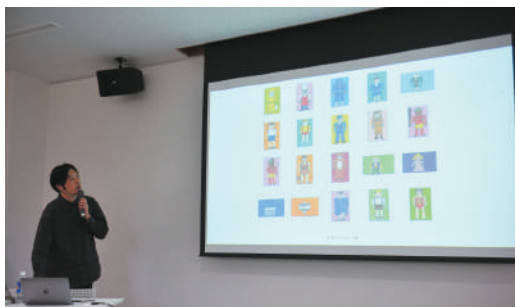
3つ目は、「思いを形にするための選択肢と環境の必要性」です。1つの表現方法が続けるのではなく、例えば、支援員が「こんなこともやってみない？」と違う選択肢を伝えることで、アーティストの表現の幅が広がることがあります。

岡部さんは、障害のある人のアートを就労につなげる

事例や社会とのつながりについても紹介しました。

多岐に渡るたんぼの家の活動のひとつに、Good Job! Center KASHIBA（グッドジョブ！センター 香芝）があります。「障害のある人とともに、アート・デザイン・ビジネスの分野をこえ、社会に新しい仕事をつくりだすこと」を目指して、2016年にオープンしました。アート、デザイン、ビジネスをテーマに障害のある人とデザイナーやクリエイター、企業が協働しています。

Good Job! Center KASHIBA でつくられた商品は、オンラインサイトで購入可能。また、同施設内にはカフェやショップもあります。ショップで販売されているのは、全国の福祉施設や障害のある人が関わって生まれた商品。取り扱っているのはオンライン・実店舗合わせて3000点以上。商品の発送や梱包、オンラインショップのパナー作成やSNSでの商品紹介も、障害者自身が行っています。



さらに、たんぼの家は展示会のプロデュース、地域アートプロジェクト、店主が作品を選んで自身の店内に飾る「プライベート美術館」、作品づくりのワークショップ、知的財産の学習推進プロジェクトなどを行っています。

最後に、障害者芸術文化活動普及支援事業として近畿ブロックで行なっている「障害とアートの相談室」について紹介がありました。

相談室でのサポート活動は4つあります。それは、現場のニーズを共有する、各地からの相談支援対応、研修事業の実施、新しい表現を通した価値の提案です。具体的には、展覧会や販売・アーカイブに関するセミナー、アトリエ活動、舞台表現の機会などを展開しています。

沖縄でのセンター設立について、岡部さんは、今回のセミナーに参加している人がセンターに関わる余地があると言います。奈良県でも、設立当初は何が必要かを現場の人に聞いていたそう。

「芸術文化活動に対して、何に困っているか、何がニーズなのかは、自分たちでもわからないことが多い。そんな時に集まって話したり情報交換をすることで、自分たちに足りないことやできていることがわかっていく。それが年間を通して、様々な形で行われていくのだろうと思う」と、岡部さんはセンターの始動にエールを送りました。

「どんな事業にも福祉の視点があっていい」 国際障害者交流センター ビッグ・アイ（大阪府）



国際障害者交流センター ビッグ・アイ（以下、ビッグ・アイ）の鈴木京子（すずききょうこ）さん（以下、鈴木さん）は、事業の考え方や舞台芸術活動支援の事例について紹介しました。

鈴木さんは舞台制作の仕事を経て、ビッグ・アイでの活動を始めました。現在は、ワークショップなどを通じて、障害者の舞台芸術や公共施設で障害のある人が表現できる場を広める活動をしています。

ビッグ・アイは、2001年に障害のある人の文化芸術活動の拠点として、国によって設立されました。就労継続支援 A型の福祉施設ですが、1500人規模のホールが併設されています。車椅子席は200席ほど作ることができます。

鈴木さんは、福祉と美術は分野を分けて語られることがあるけれど、どんな事業にも福祉の考え方があっていいと言います。

鈴木さんの事業のコンセプトは、福祉の理念を持って舞台芸術表現活動を支援すること、そして「障害者向け」と決めつけることなく、障害特性を踏まえて、参加するためのアクセス方法を考えることです。

鈴木さんは「誰もが楽しめる」「バリアフリー」という言葉に注意しているそう。「誰もが」は誰なのか、「誰に対して」のバリアフリーなのかを見直しながら、事業をつくっています。

具体的な舞台芸術活動支援の例も紹介されました。

大阪府では「大阪市障がい者舞台芸術オープンカレッジ」（以下、カレッジ）が実施されています。カレッジにはダンスの体験のコースと、スキルアップや舞台に立つことを目標としたコースがあります。

カレッジは、ダンスの体験ができるだけではありません。障害者にとって、学校を卒業した後に限られた世界しかない中、カレッジが新しい居場所となり、交流が生まれ、障害の有無関係なく仲間をつくることができます。

鈴木さんは、カレッジからトッププレイヤーになるための道筋を20年にわたってつくってきました。

その中で生まれたダンスユニットは、大河ドラマや映画、パラリンピックの開閉会式に出演。

また、2019年に開始した「ダンスドラマ」は、沖縄を含む全国7か所と海外4か所の地域から集まった参加者が1つの作品を作るプロジェクトです。プロ、セミプロ、アマチュアのダンサーがおおよそ100人関わっていて、そのうち3割が障害のある人です。

鈴木さんは、表現だけではなく鑑賞の体験も重要視しています。そこで実施しているのが、鑑賞支援です。

鈴木さんが展開する「劇場って楽しい!!」というプログラムには、劇場へ行くハードルを下げる工夫があります。照明の明暗やイヤマフの貸し出しなど、様々な障害特性に合わせた配慮があることを資料などで紹介。それにより、障害のある人本人や保護者が安心して鑑賞できるようにしています。



ただ、好きに騒いでいいというわけではありません。劇場のルールを通して、「少し頑張ってみたら、みんないっしょに楽しく公演を見られる」ということも伝えま。それは、次に別の劇場でも楽しめるように、学びの体験をしてもらうことでもあります。

また、ビッグ・アイでは、海外の障害のある人とのダンスワークショップといった国際交流に取り組むほか、相談を受けて職員を派遣し、ダンスワークショップの運営やアドバイスも行なっています。また、全国の劇場のアクセシビリティがわかるサイトを構築中。

沖縄のセンターについて、鈴木さんは「ビッグ・アイは様々なことをやっているとされるかもしれませんが、25年かかってここまでくることができた。1人でやるのは限界があるので、まずはセンターが様々な方とつながり、協力し合って、沖縄の障害者の文化芸術が推進されるといい」とメッセージを伝えました。



5.「仲間とのキャッチボールで進めていく」 登壇者によるクロストーク



ここまでの内容を踏まえ、沖縄県での今後のセンターの活動について、登壇者4名による意見交換が行われました。ファシリテーターは九州障害者アートサポートセンターの樋口龍二さん(以下、樋口さん)です。

〈クロストーク登壇者〉

喜納 平 (沖縄県障害者芸術活動文化活動支援センター ricca / 沖縄県)
谷本 裕 (沖縄県立芸術大学音楽学部 / 沖縄県)
岡部 太郎 (一般財団法人たんぼの家 / 奈良県)
鈴木 京子 (国際障害者交流センター ビッグ・アイ / 大阪府)
樋口 龍二 (九州障害者アートサポートセンター / 福岡県) *ファシリテーター

樋口さん

喜納さん、ここまでの感想は？

喜納さん

センターから発信はできても、リアクションしてもらえないと次にはつながりません。そのため、キャッチボールしていくことが推進力になっていくと思います。今日(セミナー参加者に)これだけ関心を持ってもらっていることを踏まえると、時間はかかるかもしれないけれどもいいことができると思っています。

樋口さん

ご自身の支援センターの活動について、どのように伝えていきますか？

岡部さん

これまで障害者のアート活動の多くは、施設、作業所、家庭単位で行われてきました。センターの事業は、障害者のアート活動の楽しみを国が管理するように見えるかもしれませんが、でもそうではなくて、国のプラットフォームに参加することで、これまで知らなかった人たちと関わり合えるものだと思っています。

樋口さん

仲間を増やすことについてどう考えていますか？

鈴木さん

ビッグ・アイが全部の活動をずっと行っていくことはできないので、核になる人が欲しいと思っています。活動の種をまくだけでなく、時間をかけて、継続していけると、(活動が)地域に根付くことを実感しています。

樋口さん

アートマネジメントに障害の要素を取り入れるという意味で、谷本さんは学生に鈴木さんの取り組みを伝えていきますか？

谷本さん

紹介しています。決められた楽譜をいかに演奏するかを意識している学生が多いのですが、障害を考慮した活動をするには違う能力が必要だと伝えていきます。その必要性を、先生たちにも伝えていかないとカリキュラムに組み込まれないので、今広めているところです。

6.質疑応答

最後の質疑応答では、参加者からの質問に対し、登壇者が回答しました。



Q センターへの最初の連絡はどうしたらいいですか？

喜納さん

電話、メール、手紙、FAX、なんでも大丈夫です。すでに相談はたくさんいただいていて、真摯に受け止め対応しています。センターのWEBサイトに連絡先の情報が載っています。(https://riccart.jp/contact/)



Q センターでは、ビジネスとしてマネタイズを見据えたアート活動を考えていますか？

岡部さん

今ある原画が売れて収入につながる機会は、日本国内ではほとんどありません。表現活動によって本人の自尊心や周りのスタッフ・家族の眼差しが変わる、それによって本人の日々の生活や仕事がちょっと安定する、それがまた制作に反映されるという大きな循環を考えながら支援をするのがいいと考えています。アート活動が、すぐに工賃アップにつながるとは思えない方がいいと思います。ただ、作品の二次利用や、ワークショップでものづくりのファシリテーターになってもらい(参加者に)有料で参加してもらうなど、アート活動を通じて仕事の幅を広げていくことが、少しずつ工賃アップにつながるのではないかと考えています。

〈イベントレポート〉

WEBサイトにて、イベントレポート全編を公開しています。

前編 <https://riccart.jp/2025/03/28/event-report/>

後編 <https://riccart.jp/2025/04/18/event-report-2/>

前編



後編



〈イベント動画〉

『障害のある人たちの芸術活動のこれからを考えるセミナー』の動画を全編WEBサイトにて公開しています。

<https://riccart.jp/2025/03/26/report-movie/>





アーティスト紹介

沖縄県内の障害のある6名のアーティストを訪問し、取材を行いました。
各作家が作品づくりを始めたきっかけや、日々の創作活動で大切にしていること、
制作に込めた想いや背景を丁寧に紹介しています。
表現の方法やテーマはさまざまですが、どの作品にも作家自身の感性や世界観が
力強く表れており、観る人の心を動かします。自由で多様な表現に満ちた、彼らの
創作の魅力をぜひご覧ください。



#CASE01 | 玉城 愛子さん Aiko Tamashiro
楽しく、ハッピーに「好き」に向かって一直線

P.18－19



#CASE02 | 洋介さん Yosuke
作品が教えてくれる「好きな人」「好きなもの」

P.20－21



#CASE03 | 平田さん Hirata
見る人を圧倒するダイナミックさと細かさ。
切れ端1枚もムダにしない作品づくり

P.22－23



#CASE04 | 金城 裕之さん Kinjo Hiroyuki
色えんぴつ1本1本、余白にまでこだわって、
好きなものを描き続ける。

P.24－25



#CASE05 | 宮平 康生さん Miyahira Kouki
破れた画用紙も、作品に。
遊ぶように楽しく、自由に描く

P.26－27



#CASE06 | 大城 正雄さん Oshiro Masao
細部にこだわり、ぶれずに
「いすゞ (ISUZU) の車」をつくり続けて12年

P.28－29

〈アーティスト紹介〉

WEBサイトにて、アーティストの取材記事を全編公開しています。
<https://riccart.jp/stories/>





インタビューページ

アーティスト紹介



#CASE01 | 玉城 愛子さん Aiko Tamashiro

PROFILE

絵を描き始めたのは小学生の頃。

2010年、社会福祉法人トゥムヌイが運営する障害者就労支援施設イノーでの就労を始める。

現在は、沖縄式島豚焼肉ばないで働きながら、アート活動を行っている。カラフルで明るい作風が持ち味。



アーティスト
紹介ページ



Interview

玉城 愛子さん | Aiko Tamashiro

楽しく、ハッピーに「好き」に向かって一直線

今回訪れたのは「生き甲斐のある生涯を支援する！」をミッションに放課後等デイサービスや障害者就労支援を展開する沖縄県糸満市の社会福祉法人トゥムヌイ。お話をうかがったのは、就労をしながらアート活動続ける玉城愛子（たましろあいこ）さん、そして、支援員の照屋有紗（てるやし）さんです。

焼肉屋さんの仕事の休憩時間で、アート活動を。

玉城愛子さん（以下、玉城さん）は、普段、沖縄県糸満市内にある沖縄式島豚焼肉ばないで働いています。今、担当しているのは主にスタッフのまかないづくり。週に5日、9時から16時まで仕事をしていますが、その合間の休憩時間を使って、作品づくりを続けてきました。

支援員の照屋有紗さん（以下、照屋さん）によると「アート活動の時間は特別に設けていないけれど、気づいたらこんなにたくさんの作品が出来上がっていた」と。

休憩時間は1時間。玉城さんは、最初の20-30分で食事をし、残り時間で制作に取り組みます。

制作風景を拝見させてもらいましたが、そこには一切の躊躇が見られません。迷いなく線を引き、直感的に色を選び、塗っていく——取材陣である私たちという、いつもは存在しないギャラリーがありながらも、集中し、迷いなく、一直線にどんどん描き進める玉城さんの姿が印象的でした。

一緒にいるとみんなが楽しくなる！

職場のムードメーカー

玉城さんは、いつ頃から制作を始めたのでしょうか。絵を描き始めたのは小学生の頃。絵を習ったことがきっかけでしたが、いつしか「自分で考えて描きたい」と思うようになっていったそうです。

玉城さんには知的障害があり、15年前、社会福祉法人トゥムヌイが運営する障害者就労支援施設イノーでの就労を始めました。それから現在まで、休憩時間での作品づくりを続けてきました。

玉城さんは「今の仕事は、とても楽しい」と笑みを浮かべます。また、支援者の照屋さんは「愛子さんがいるとみんなが楽しくなる、職場のムードメーカーです」と教えてくれました。

玉城さんが絵を描くときに使う画材の一部は、職員の方から誕生日にプレゼントされたものだそう。また、玉城さんも、折り紙や手づくりのメダルなどを職員にプレゼントしたりすることもあるとか。

とってもフレンドリーな玉城さん。一体、どのような作品を生み出しているのでしょうか。詳しくお話をうかがっていきましょう。

作風は「カラフル」「ハッピー」

玉城さんの作品の特徴は、何と言ってもカラフルさ。色えんぴつやクーピーを使って制作することが多いそうですが、見ているだけで元気になれるような、ビビッドで明るい色が選ばれています。

「どんなことを考えたり、感じたりしながら作品をつくっていますか？」という取材陣の問いかけに、玉城さんは「楽しい」とひと言。

たしかに、玉城さんが生み出した一つひとつの作品からは「楽しさ」が溢れ出てきます。

よく描くモチーフは、花や鳥、魚、動物、お菓子、ハート、サンリオのキャラクター、ロボットなど。本を見て描くこともあれば、見ずに自分で考えて描くこともあるそうです。

「好きで、自分が描きたいものを描いている」と玉城さんは話します。

見ているだけで楽しく、元気になれる。そんな玉城さんの作品・モチーフは、商品化されたこともあります。

きっかけはコロナ禍。焼肉屋を閉めなければならなくなったとき、何かできることはないかと考えるなかで、グッズ・商品開発を行うことになりました。

そしてつくられたのが、玉城さんや他の利用者が描いたモチーフを使ったポチ袋やポストカード、ご祝儀袋など。これらは、市のイベントや生協等を通じて販売されたのですが、商品の実物を見た取材陣からは「ほしい！」の声が。味わいのあるモチーフに、カラフルな色味、そばに置くだけで明るく、楽しい気持ちになれそうです。

一人暮らしをしてロボットをつくりたい

玉城さんは、これからどんなことに取り組みたいのでしょうか？

今、玉城さんには2つの夢があるそうです。1つめは「将来は一人暮らしをして、ロボットをつくりたい」。いつか一人暮らしをしたいという夢をもっている玉城さん。今もよく絵のモチーフとして選ぶ「ロボット」を、一人暮らしの家で、思い切りつくってみたい——そんな野望を教えてくださいました。そして、もう1つの夢は「いつか展示会を開いて、大好きな Snow Man（スノーマン）に見てもらいたいこと」。

「Snow Manの目黒さんが大好き」と照れながら話す玉城さん。今より展示・発表の機会が増えて、いつか大好きな Snow Manに自分の作品を見てもらえるようになるのが、玉城さんのもう1つの夢です。

「好き」に向かって一直線に、楽しく作品づくりに打ち込む玉城さんの夢が、いつか叶いますように。心から応援しています。

アーティスト紹介



インタビューページ



#CASE02 | 洋介さん Yosuke

PROFILE

2007年より社会福祉法人 大樹会運営する就労継続新施設「くわの実」へ。当初は草刈班に所属。コロナ禍の在宅期間中に絵を描きはじめ、その後、同施設の生活介護プログラム「atelier くわの実」に参加し、アート活動を行っている。その日好きな人やキャラクターを中心に、背景を区別して塗る描き方がお気に入り。



アーティスト
紹介ページ

アーティスト紹介



Interview

洋介さん | Yosuke

作品が教えてくれる「好きな人」「好きなもの」

今回訪れたのは「想いをかたちに とともに歩む未来を創る」をミッションに、就労継続支援や生活介護サービス、グループホームを展開する沖縄県うるま市の社会福祉法人 大樹会。お話をうかがったのは、大樹会が運営する就労継続新施設「くわの実」の生活介護プログラムでアート活動を行っている洋介（ようすけ）さん、そして、施設長の西村夏生（にしむらなつき）さんです。

好きな人は日替わり

洋介さんが参加している生活介護プログラムは、絵画教室「atelier くわの実」（以下、アトリエ）です。週2回、10時～14時の間で作品づくりをしています。

1つの作品にかかる時間は、短いときは1時間ほどです（たとえば紙の真ん中に人物だけの場合など）。施設長の西村夏生さん（以下、西村さん）によると、午前中の活動の中で1枚、午後で1枚仕上げる意識があるそう。他の参加者も同

じく、日をまたいでつくるのではなくて、何が何でもその日のものをその日で終わらせようとするとのこと——なんという根気とスピードでしょう。

ダウン症のある洋介さんは、その日その日で好きな人やキャラクターが変わります。そして、その日に好きな人やキャラクターの名前を自分の名札に書いています。

また、その好きな人と自分は家族という気持ちがある様子。洋介さん自身の名前ではなく、洋介さんが名札に書いた名前を呼ばないと、反応してくれないこともあるとか。

好きな人と自分は家族で、さらには、自分と好きな人は一体化しているという感覚なのでしょうか。

取材当日の洋介さんの名札には「ロビン」と書いてありました。くわの実のスタッフにロビンさんという方がいるので、その方がこの日の洋介さんのお気に入りなのかもしれません。

過去には、ロビンさんの写真を印刷してきて、目のところをくり抜いてお面にしていたこともありました。好きな人、お気に入りの人ともっと近づきたい——そんな気持ちのあらわれでしょうか。

洋介さんのお茶目さや、人への興味がうかがえます。

ふと、西村さんが「できたんだねー」と声をかけた方向を取材陣が見てみると、作品を頭の上に掲げて立ち上がっている、誇らしそうな表情の洋介さんがいました。

洋介さんからは、言葉を発してのコミュニケーションが多くありません。それでも、西村さんは、洋介さんの行動や仕草、表情から気持ちを読み解いていきます。

きっかけはコロナ禍の在宅期間

洋介さんが絵を描き始めたきっかけは、何だったのでしょうか？

洋介さんは2007年の大樹会立ち上げの時期にやってきましたが、最初はずっと就労継続支援 B型の草刈班として、毎日作業を行っていました。

ところが、2020年に新型コロナウイルスが流行しはじめます。

病院に行くのが苦手な洋介さん。感染して病院に行くことがないよう、在宅で過ごしてる期間がありました。その時に、洋介さんは、自宅に絵を描いていたそう。

それがきっかけとなり、コロナ禍が明けた後も、草刈作業ではなく、生活支援とアート活動がしたいということで、アトリエへの参加を始めました。2022年頃のことです。

洋介さんが特によく描くのは人物です。くわの実の職員や、戦隊ヒーローたちが多くいます。

取材の時に拝見させてもらった作品は、タイトルが「アメリカ」。西村さんは「たぶんトランプ大統領だと思っんです。オバマさんが大統領だった時はオバマさんって書いてたので」と教えてくれました。

名札からも、作品からも、洋介さんの“人のことが好き”という気持ちがあふれています。

新しい制作スタイルにチャレンジ！

洋介さんはどのように作品をつくっているのでしょうか。

実際の作品づくりの風景を拝見すると、洋介さんは机に向かい、立ったまま腰を曲げ、机に顔を近づけて色塗りをしていました。このスタイルは取材を行った2月に入ってから始めたようです。

きっかけは翌月の沖縄県立博物館・美術館での展示会用の作品をつくり始めたこと。

普段は B4サイズの画用紙に絵を書いているのですが、もっと大きい紙にチャレンジすることになりました。大きな作品を描き始めると、座ったままでは描きづらくなったようで、立ちながら描くスタイルが生まれました。

新しくなったのは、作品をつくる時の体勢だけではなく、

西村さんによると、紙をどんなに大きくしても、真ん中だけに描いて完成とする利用者が多いそうですが、洋介さんも同様でした。

しかし、展示準備を機に職員から「紙を埋め尽くしてみたい欲しい」というオーダーが入りました。すると、紙を埋め尽くした作品が出来上がったそう。

それまでの洋介さんは、好きな人やキャラクターを真ん中に描き、その横にその人（キャラクター）の名前を添えて終わり、とすることがほとんどでした。しかし、今では、人やキャラクターの周りの余白を区別して、色を塗り、埋め尽くしていく——これが、洋介さんの新しい絵の描き方になっていきました。

洋介さんが参加しているアトリエには「アートを通して人と人をつなげる」というコンセプトがあります。その“つなげる”機会として、展示会開催のほか、カレンダーやポチ袋などのグッズ制作を行っています。

グッズに使われている洋介さんの作品は、先にご紹介した作風とは一味違うものでした。

青いスープの沖縄そば、明るいオレンジ色のシーサー、楽しそうにエイサーを踊る人たち——ポップな色使いと繊細な線が特徴です。見ているとなんだか楽しくなってきます。

作品から伝わる、好きな人、好きなもの

洋介さんは、誰かに描かされるという感じではなく、描きたいものを描いているようです。そして、モチーフとして表現しているのは好きな人、好きなもの。

洋介さんが絵を描くようになって、洋介さんが今好きなものや気になっているものが、職員にもわかるようになったそうです。

西村さんは「作品を通して洋介さんとコミュニケーションが取りやすくなった」とお話ししてくれました。

今回ご紹介した作品の登場人物の他に、洋介さんにはどんな人やものが好きなのでしょう。

これからも、洋介さんの作品が「好きな人、好きなもの」を伝えてくれることでしょう。アトリエ内ではもちろん、展示や販売の中で、作品を通じたつながり、コミュニケーションが増えていくのが楽しみです。

アーティスト紹介



インタビューページ



#CASE03 | 平田さん Hirata

PROFILE

絵を描き始めたのは高校生の頃。2001年、社会福祉法人トゥムヌイが運営する障害者就労支援施設イノエでの就労を始める。現在は、沖縄式島豚焼肉ばんないで働きながら、アート活動を行っている。コソコソと細かい作業を繰り返すことで生み出される、陸、海、深海の動物たちの世界は、見る人を圧倒する。



アーティスト
紹介ページ

アーティスト紹介



Interview

平田さん | Hirata

見る人を圧倒するダイナミックさと細かさ。
切れ端1枚もムダにしない作品づくり

今回訪れたのは「生き甲斐のある生涯を支援する！」をミッションに放課後等デイサービスや障害者就労支援を展開する沖縄県糸満市の社会福祉法人トゥムヌイ。お話をうかがったのは、就労をしながらアート活動が続ける平田（ひらた）さん、そして、支援員の照屋有紗（てるやありさ）さんです。

小さな折り紙を1枚ずつ、
こつこつと描いて貼っていく

平田さんが普段働いているのは、トゥムヌイが運営する沖縄式島豚焼肉ばんない。まかない班としてスタッフのまかないづくりを担当しています。平田さんは、週に5日、9時から15時までの仕事が終わってから、お父さんが迎えに来てくれる15時半から16時過ぎまでの時間を使って、作品づくりをしています。

では、どのように作品づくりをしているのでしょうか。平田さんは焼肉屋さんの一角にある大きなテーブルを使用しています。取材にうかがった日は、テーブルいっぱいに広げられた段ボールに、1cm角くらいに刻まれた、色とりどりの小さな折り紙を1枚ずつのりで貼っていました。トゥムヌイが手がける他の事業所で、パッションフルーツの作業をしている班があります。平田さんが使っているダンボールは、その班から支援員さんがもってきたものだそう。そのダンボールは、大人が両腕をのばしたくらいのサイズ。平田さんは、以前、帰宅後にも作品づくりを続けようと思って持ち帰ったことがありました。でも、家で作業するには大きすぎて、この作品づくりは仕事場のみで行うことにしたそう。

「動物だけの世界があったらいいな」

平田さんがトゥムヌイにやってきたのは2011年。高校を卒業してすぐのタイミングでした。高校生の時に絵を描き始めた平田さん。その頃は、画用紙に人間の絵を描いていました。その後、トゥムヌイに入った平田さんは、動物の図鑑を見る機会があったそう。「動物だけの世界があったらいいな」と思ったことがきっかけで、平田さんは動物を描き始めました。でも、平田さんの画用紙に動物を描くという制作スタイルに、スランプの時期が訪れます。コロナ禍のことでした。その頃、平田さんは、支援員から大きなダンボールをもらったことがありました。それを見て「何か貼れるかな」と思ったことが、今の作品のつくり方につながったのだそう。

作品づくりに欠かせない、こだわりの工程

平田さんの作品はどのように出来上がっていくのでしょうか。工程はいくつかのパートに分かれています。まずは下地。ダンボールの左下から、異なる色のクレヨンでタイルのように順番に塗りつぶしていきます。次は動物の準備です。図鑑にある動物のシルエットを見ながら、折り紙の白い面に鉛筆で形を描いていきます。それができたら黒色のネームペンでなぞり、鉛筆の線が絶対に残らないよう消しゴムで消します。そして、平田さんがオリジナルで考えた模様や顔を描いていきます。

20～30枚ほどの動物が作れたら、ペンの線に沿って切っていきます。なお、動物を切り取った後の折り紙は、細かく刻み、袋に入れて大切にしておく。これも平田さんのこだわりです。パーツが揃ったら貼り付けていきます。一番最初に太陽。そして動物たちを順番に貼っていきます。最後は、細かく刻んだ折り紙をブランクトンに見立て

て、動物たちの隙間を埋めるように1枚ずつダンボールへと。平田さんは、白い部分を残したくないと、ダンボールを色や紙で埋めているのです。

平田さんは作品を作っている時、どんなことを考えているのでしょうか。取材陣からの質問に、平田さんは「見た人が癒されて欲しい」と答えてくれました。そして「この作品をみることで、動物を大切に思ってもらえるかな」とも。平田さんの言葉からは、動物に対する虐待が多いことに心を痛めている気持ちが伝わってきました。また「人間を描くのが苦手」という平田さん。話を聞いていくと、完全に動物だけの世界をつくりたいように見受けられました。

でも、本当は「動物たちの中に人間も入れてあげたい」そうです。そのため、平田さんは、今、人間を描くことにも挑戦しています。

普段の平田さんの作品づくりをよく知る、支援員の照屋さんは「黙々と取り組む姿が素敵」と教えてくれました。平田さんは、コンテストにも積極的に、受賞したことはないものの、毎回「賞を取るぞ!」と目標を立てています。公募ポスターが休憩室に張り出されると、すぐに「応募したい」と支援員に声をかけるそう。

平田さんの作品は、職場で販売しているガチャガチャの商品や、農協で販売した商品に使用されています。商品開発の時は、まず照屋さんから「こんな絵描ける?」と平田さんに投げかけます。すると、平田さんは、できない時は「できない」と言い、引き受けた時には必ず仕上げてくれるそう。そんなエピソードから、平田さんの誠実さや責任感がうかがえました。

「次は宇宙で動物たちのまちをつくる」

平田さんの1つの作品をつくり終わったら、次の作品に取り掛かります。これまでに、海の世界や海と陸の世界などを作品にしてきた平田さん。「次につくりたい作品は何ですか」という取材陣の問いかけに、平田さんはこう答えてくれました。「宇宙の世界で動物たちのまちをつくる」宇宙を舞台にした動物たちのまちには、人間も仲間に入っているのでしょうか。いずれにしても、その世界には、きっと動物たちや見る人への愛があふれていることでしょう。拝見できる日が待ち遠しいです。

～平田さんの制作風景～

社会福祉法人トゥムヌイ制作の動画です。ぜひ平田さんの実際の制作の様子もご覧ください。



アーティスト紹介



インタビューページ



#CASE04 | 金城 裕之さん Kinjo Hiroyuki

PROFILE

絵を描き始めたのは3歳の頃。特別支援学校卒業後、平成25年よりセルフサポートセンターびゅあへ。就労継続支援 B型 陶芸班として、イラストやロゴを中心とした作品づくりを行いながら、さまざまなイベント出店に参加している。ロケットなど宇宙関連のモチーフや標識、ロゴなどのモチーフを、独自のチャームングなタッチで描いている。



アーティスト
紹介ページ

アーティスト紹介



Interview

金城 裕之さん | Kinjo Hiroyuki

色えんぴつ1本1本、余白にまでこだわって、好きなものを描き続ける。

今回訪れたのは「地域に根差し、地域と共に、地域の福祉に貢献する」を理念に掲げ、利用者が地域社会において自立した生活を営む支援を目的とした福祉事業を展開するセルフサポートセンターびゅあ。お話をうかがったのは、アーティストの金城裕之（きんじょうひろゆき）さん、そして職業指導員の我喜屋聖子（がきやししょうこ）さんです。

色えんぴつ1本1本へのこだわり

金城裕之さん（以下、金城さん）は、セルフサポートセンターびゅあの就労継続支援 B型「陶芸班」として、作品づくりを行なっています。「陶芸班」といっても、金城さんが取り組むのはイラスト作成。
毎日10時頃から15時過ぎまで、休憩時間を除く4時間ほどが制作時間です。
金城さんには、自閉症スペクトラムと知的障害があります。

私たち取材陣がうかがったとき、金城さんはイヤーマフを付けていました。職業指導員の我喜屋聖子さん（以下、我喜屋さん）によると、イヤーマフとは防音保護具のことで、聴覚過敏の方がつけていることがあります。金城さんは、学生時代に子どもの甲高い声が苦手ですつけ始めたそうなのですが、今はこのスタイルが落ち着くようです。

「色えんぴつが好き？」という我喜屋さんの問いかけに「色えんぴつが好きだよ」と金城さん。金城さんとのコミュニケーションは、このように“おうむ返し”が大半です。

我喜屋さんによると「こうした（おうむ返し）のコミュニケーションがほとんどですが、本当に好きなものは“好き”と意思表示してくれる」そう。

金城さんは“好きなもの”への思い入れが人一倍強いようです。

金城さんが“好きなもの”の一つが、色えんぴつ。下の写真のように「もう捨ててもいいんじゃないか？」と思うほど短くなったものも使い続けています。

ひとくちに「ピンク」と言っても、色えんぴつのメーカーによって色味は少しずつ異なります。金城さんは、そんなわずかな色味の違いを区別し、一つひとつを大切に扱っているようでした。

大好きなものを、3歳から描き続けてきた

金城さんは、特別支援学校卒業後、平成25年からセルフサポートセンターびゅあに通い始めました。

では、金城さんはいつ頃から絵を描き始めたのでしょうか？
ご家族からうかがった話によると、絵を描き始めたのは3歳頃。今もお気に入りのモチーフを、当時から描いていたそうです。

金城さんが、子どもの頃から好んで描いてきたモチーフは「企業ロゴ」や「標識」などです。

金城さんは「企業ロゴ」や「標識」を、まるで絵を描くように形にしています。見たものを覚えているようで、お手本がないのに、迷いなくサラサラと描いていきます。

また、金城さんは「商品パッケージ」も好んで描きます。やわらかいタッチながらも、細部まで丁寧に描かれたモチーフからは、金城さんのこだわりが感じられます。そんな丁寧なこだわりこそが、金城さんにとっての“好き”の表現なのかもしれません。

ロケットの打ち上げを見学に行くほどの「宇宙好き」

企業ロゴや標識のほかに、金城さんが子どもの頃から好んで描き続けてきたモチーフがあります。

それが、宇宙関連のもの。特に好きなのは、ロケットや月、土星、UFOなどです。

金城さんの「宇宙好き」は、かなり筋金入り。特にロケットが大好きで、なんと「家族で何度も、種子島にロケットの打ち上げを見に行ったことがある」ほどだと我喜屋さんは教えてくれました。

ここまで金城さんのイラストを見て気になったことはありませんか？

取材陣が印象的だったのは、余白のとり方です。

大きな紙の一部に、ちょこんと描かれたロゴや標識、ロケットなどのモチーフ。

我喜屋さんにうかがうと、これも金城さんのこだわりだそう。

「この（紙1枚）のスペースのなかに、しゃもじが1つだけ描かれていたこともあり。この余白にも思い入れがあるみたいなんです」と我喜屋さん。

真っ白な紙のなかに、控えめに描かれながらも印象に残るチャームングなモチーフ。

金城さんは、ロゴや標識、パッケージ、ロケットなどの宇宙関連のものほかに「人」も描きます。

取材当日、金城さん本人が、自ら描いたイラストを指さしながら「これはお父さん、これはお母さん、これは裕之さん（自分）……」と、取材陣に紹介してくれました。

こうした金城さんの作品は、これまでに商品化されたことがあります。その一部が、人の似顔絵をもとにしたポチ袋やレターセットです。これらの商品は、利用者自らがイベントに参加し、販売活動を行っています。

作品づくりを通じて、人と関わっていく

金城さん本人は「商品や作品をつくる」という感覚はあまりもっていない様子。好きなものを、ただ描き続けている——そういう感覚で日々を過ごしているのかもしれない。

とはいえ、金城さんの描くモチーフは、とても魅力的です。

そんななかで、職業指導員の我喜屋さんは金城さんに、新たな挑戦を提案しました。それは、イベントに来てくれた方の似顔絵を描くこと。

金城さんは、これまで、あまり人前に出ることがなかったそう。でも、我喜屋さんは「本人の魅力をたくさんの人に知ってほしい」と、金城さんとイベント来場者が関わる機会をつくろうと模索しています。

金城さんの特性上、言葉のコミュニケーションで「やりたい」を引き出すのには難しさがあります。だからこそ「彼がやっていることにに対してこちらが提案し、本人の意志を汲み取りながら、できることや強みを増やしていきたい」と我喜屋さんは話します。そして「いつか『裕之さん（金城さん）に描いてほしい！』と言われるようになるといい」と。

思い入れをもって、一つひとつ丁寧に好きなものを描き続けていく金城さん。絵を通じて人と関わっていく挑戦を、心から応援しています。

アーティスト紹介



#CASE05 | 宮平 康生さん Miyahira Kouki

PROFILE

高校卒業後、2024年より社会福祉法人大樹会運営する就労継続新施設「くわの実」へ。生活介護プログラム「atelier くわの実」に参加し、アート活動を行っている。
てるてる坊主や魚のような形を、ペンやアクリル絵の具で描くことが多く、具体的な形にとらわれない、明るい配色や優しい色を使用した作品をつくり続けている。



アーティスト
紹介ページ



Interview

宮平 康生さん | Miyahira Kouki

破れた画用紙も、作品に。 遊ぶように楽しく、自由に描く

今回訪れたのは「想いをかたちに とともに歩む未来を創る」をミッションに、就労継続支援や生活介護サービス、グループホームを展開する沖縄県うるま市の社会福祉法人大樹会。お話をうかがったのは、大樹会が運営する就労継続新施設「くわの実」の生活介護プログラムでアート活動を行っている宮平康生(みやひらこうき)さん、そして、施設

長の西村夏生(にしむらなつき)さんです。

宮平康生さん(以下、宮平さん)は、「くわの実」が展開する生活介護サービス内の絵画教室「atelier くわの実」(以下、アトリエ)に参加しています。通常の活動日は週に2日、10時～14時です。宮平さんは、この2日間に加えて、週に1日、他の利用者が別の活動を行う時間でも作品づくりをしています。

施設長の西村夏生さん(以下、西村さん)によると、宮平さんは、合間に遊びやトイレ、歩き回ったりする時間を取

りながら、午前と午後それぞれ1時間くらいを作品づくりにかけているそうです。その中で出来上がる作品数は2～3枚くらい。

取材当日、最初はアトリエの部屋とトイレや廊下を行ったり来たりしていた宮平さん。その後、気持ちが落ち着いたのか、席につきペンで絵を描き始めました。

「宮平さんと西村さんが並んでいる様子を撮影させてもらえませんか？」という取材陣からのリクエストを受けて、西村さんは宮平さんの横に座ろうとしました。すると、宮平さんは少し恥ずかしそうな表情で、テーブルの上で腕を伸ばして境界をつくるような仕草をしました。その様子を見た西村さんは「嫌だった？ ごめーん」とにこやかに話しかける——こんな場面がありました。

宮平さんが、他者と言葉でコミュニケーションをとることはほとんどありません。発したとしても「あー」「うー」など。西村さんは、そんな言葉少ない宮平さんの仕草、表情に寄り添いながら、言葉に変えて気持ちを確認していました。

そんな二人のやりとりからは、とても穏やかな空気が感じられました。

マイルールを大切に、 落ち着く環境での作品づくり

宮平さんは高校を卒業してすぐ、2024年にアトリエでの活動をはじめました。

アトリエに入る前から絵を描いていた宮平さん。絵を描きたくてアトリエに入ったのだと、西村さんは教えてくれました。

以前から宮平さんのお母さんがアトリエのインスタグラムや展示会を見ていたことも、宮平さんのアトリエ参加のきっかけになりました。

知的障害と自閉症スペクトラムのある宮平さんは、道具のセッティングで大事にしている独自のルールがあるようです。

西村さんに教えてもらい気がついたのですが、宮平さんの机の上のペンは、キャップと本体が隣同士に並ぶように置かれています。また、ティッシュの箱は下に丸めたティッシュを挟んでありました。このように、ペンやティッシュの箱の置き方ひとつにも、宮平さんが落ち着くマイルールがありました。

破れた画用紙も作品に。 画材の感触を楽しみながら、自由に描く

すいすいとペンを走らせる宮平さん。

宮平さんの作品は、てるてる坊主や魚のようなモチーフが描かれているものが多くあります。色はその時、気に入ったものを使っているようです。この日、宮平さんの画用紙には、丸と三角を組み合わせたような形が、ピンクや黄色で描かれていました。

宮平さんはペンの他に、アクリル絵の具を使って作品を

つくる日もあります。

アトリエ内の畳スペースでは、利用者さんの作品が一面に乾かされています。その中には、アクリル絵の具で描かれた宮平さんの作品もありました。

水分たっぷりの絵の具がにじみ、混ざり合って描かれた画用紙は、小さくまざまに破れている……なぜでしょうか。

画用紙が破れている理由を、西村さんが教えてくれました。
宮平さんが絵の具を使う時は、絵の具に水分をたっぷり含ませて、まず自分の手に塗っていきます。そして、そのまま手で画用紙に描きます。でも、水分が多いため、だんだんと画用紙はしななってきて破れははじめます。すると、宮平さんはそのまま紙を破くんだそう。

そんな宮平さんのユニークな制作スタイルを「感触を楽しんでいるところがあるかもしれない」と、西村さんは説明してくれました。

いわゆる常識的なやり方ではないかもしれませんが、手の平に塗る絵の具の感触、画用紙が破れていく感触は、一体どのようなものなのでしょう。

宮平さんの、具体的な形にとらわれず、色や質感で遊んでいるような作品から感じられる自由さや温かさ、ずっと見ていたくなる心地よさは、楽しく遊ぶような制作スタイルも影響しているのかもしれません。

作品を通して人とつながる喜び

「絵を見て興味を持ち、その作品を描いている人のことを知りたくなる」。そんなふうに、アトリエの利用者と、彼らの作品を見た人がつながってほしい——と、西村さんは希望を込めて語ってくれました。

宮平さんにも、以前こんなことがあったそうです。
沖縄県の北谷町で展示会を行った時のこと。

宮平さんのお母さんからの連絡を受けて、なんと、宮平さんの小学校時代の先生がいらっしゃったそう。その時の宮平さんの様子について、西村さんは「とても嬉しそうだった」と話します。

当時の様子を思い浮かべながら、西村さんは、アトリエの活動と利用者の活動について次のように話してくれました。

「作品の販売や展示会を行うと、アトリエの利用者はそこにおしゃれして行き、来場者から褒めてもらい、おいしいものを食べて帰ってきます。その経験と、嬉しかった体験は利用者の自己主張につながっていくんです」

これからそうした機会が増えていくことで、宮平さんは、より自分自身を表現していくようになることでしょう。これから、宮平さんは、どのような作品を描き、どのような人と出会っていくのか、私たち取材陣も楽しみでなりません。



インタビューページ



#CASE06 | 大城 正雄さん Oshiro Masao

PROFILE

平成25年よりセルフサポートセンターびゅあの就労継続支援 B型の陶芸班として、作品づくりに携わっている。それ以前はガソリンスタンドで働いたこともあるほどの「車好き」。特にいすゞ (ISUZU) の車が好きで、びゅあに参加して以来、いすゞの車の陶芸作品をつくり続けてきた。手びねりの素朴な作風が持ち味。沖縄県身体障害者福祉協会主催の沖縄県身体障害者福祉展で、五度の受賞経験あり。



アーティスト
紹介ページ

アーティスト紹介



Interview

大城 正雄さん | Oshiro Masao

細部にこだわり、ぶれずに

「いすゞ (ISUZU) の車」をつくり続けて12年

今回訪れたのは「地域に根差し、地域と共に、地域の福祉に貢献する」を理念に掲げ、利用者が、地域社会において自立した生活を営む支援を目的とした福祉事業を展開するセルフサポートセンターびゅあ。お話をうかがったのは、アーティストの大城 正雄 (おおしろ まさお) さん、そして職業指導員の我喜屋 聖子 (がきや しょうこ) さんです。

「いすゞ (ISUZU) の車」をつくり続けて12年

大城正雄さん (以下、大城さん) は、セルフサポートセンターびゅあの就労継続支援 B型「陶芸班」として、作品づくりを行なっています。毎日10時頃から15時過ぎまで、休憩時間を除く4時間ほどが制作時間です。

大城さんがびゅあに通い始めたのは平成25年。大城さんは、当時からぶれずに同じものをつくり続けてきました。大城さんがつくり続けてきたもの——それは「いすゞ

(ISUZU) の車」です。

取材陣が訪れた際、大城さんは「運転席」の制作の真っ最中でした。小さくちぎって丸めた粘土を取り付けていく作業は、まるで精密機械をつくるかのよう。

一つひとつ手作業でつくられた作品は、細部の仕上げをした後、焼いて、色をぬって完成です。

手びねりで素朴な作風は、どこかあたたかみがあります。後で詳しくご紹介しますが、大城さんの作品はとても人気があるそう。

職業指導員の我喜屋さんによると「商品だけではなく作品としても見てほしいから、今はつくりためている最中」だといいます。

今までにつくりあげた作品数は、100個を超えます。「100個も？」と驚きましたが、なんと大城さんは、一つの作品を1日で作くりあげるそうです。焼く前の工程までであれば「朝から作業を始めて、夕方には仕上がる」と。驚くような速度と、集中力です。

では、一体どうして大城さんは、ここまでの熱意をもって、いすゞの車をつくり続けているのでしょうか。

「つくったものを使ってもらえるのは嬉しい」

子どもの頃から、ずっと車が好きだったという大城さん。セルフサポートセンターびゅあに通う以前は、ガソリンスタンドで働いていたこともあるそうです。大城さんは「特に、運送会社の車が好きだった」と。

そして、平成25年にびゅあに通い始めてから、いすゞの車をつくり始めました。

でも、最初から今のようにつくれたわけではありません。

子どもの頃から車は好きでしたが、大城さんが陶芸を始めたのは12年前 (平成25年) から。

最初は、部品がとれてしまったり、きれいに仕上がるのが難しく、苦戦していました。でも、試行錯誤を続けるなかで徐々にきれいに仕上がるようになっていったといいます。

そんななかで我喜屋さんが思いついたのが、大城さんのつくった車を「植木鉢」にするというアイデアです。大城さんがつくったトラックの荷台に、畑班がつくった多肉植物を入れて、販売していく——我喜屋さんのこのアイデアは、奏功します。

各所のイベントで販売を始めたら、大城さんのつくった植木鉢を兼ねた車は大好評。どんどん売れていきました。中には、以前イベントで買った方から「今でも飾っているよ」と言われることもあるそう。

こうした経験から、大城さんは「つくったものを人に喜んでもらえることが嬉しい」と感じるようになりました。そして、徐々に、お皿やお茶碗、コップなどの制作にも取り組み始めました。

大城さんをはじめ、びゅあに通う他の利用者がつくった陶芸品などは、県内外の雑貨屋さんでも販売されていますが、大城さんのつくった素朴な作品たちは、人気を集めているそうです。

運転席のシート、ハンドル、ギア……

細部にまでこだわった作品づくり

大城さんの作品を、さらに詳しくみていきましょう。

まず、大城さんが好むモチーフは、なんといってもいすゞの車ですが、たくさんある車のなかでも「ダンプカーなどの大型車が特に好き」と話します。

大城さんのつくる作品は、細部までこだわってつくられていますが、お手本は見ずにつくるそう。

大城さんに聞くと「出勤のときに見た車を覚えていて、あとは想像しながらつくっている」。

大城さんの作品を細部まで見てみると、席が2列の車と1列の車があったり、ドアが2つあるもの、1つあるものがあつたりと、素人目にはわからないほど細かな部分までこだわってつくられています。我喜屋さんは、そんな大城さんを「好きだからこそ、ここまでこだわられるのではないかな？」と見ています。

かつての販売イベントで、いすゞの自家用車 (「ビッグホーン」) に乗っていた方が、大城さんがつくった作品 (ビッグホーン) を見て、「自分の愛車が、こんなにカッコよくつくられていて嬉しい！」と喜んでいて——そんな出来事があったそう。

大城さんの「好きだからこそ、こだわり」が、同じくいすゞの車愛する方に伝わったのではないのでしょうか。

これからも、いすゞへの愛を形にしてい

大城さんは、これからも変わらず、いすゞの車をつくり続けていく様子。「次は大型バスをつくりたい」と、取材陣に意気込みを教えてくださいました。

また、我喜屋さんは「せっかく、これだけの作品をつくっているの、いつか、いすゞさんに、この作品を見てもらいたい」と話します。

細部にこだわりながらつくり続けてきた作品たちと、大城さんの一途ないすゞ (ISUZU) への愛が、いすゞ自動車を含めたさまざまな方に届いていくことを、取材陣も願わずにはられません。



アーティスト紹介

掲載申し込み・ご相談・お問い合わせ

アーティスト掲載申し込み

当センターWEBサイトの、アーティスト紹介ページに掲載希望の方を随時受付しております。

掲載をご希望の方はリンクのアーティスト掲載申し込みページよりお申し込みください。

<https://riccart.jp/request/>



■ お申し込みから掲載までの流れ

STEP 1 | お申し込み

掲載申し込みフォームから必要事項を入力し送信してください。



STEP 2 | 掲載ページの作成

当センターで申し込み内容を確認し、ページの作成を行います。

お申込みから掲載されるまで時間を要しますので、あらかじめご了承ください。



STEP 3 | 掲載完了

アーティスト紹介ページに掲載しましたら当センターよりご連絡を差し上げます。

※ 掲載できる作品は10点までとなります。

※ お申込みから掲載されるまで時間を要しますので、あらかじめご了承ください。

ご相談・お問い合わせ

障害のある方、障害のある方の活動を支援する方などに、芸術文化活動における支援方法、創作環境整備、権利保護、作品販売等に関する相談を受け付け、関係機関や専門家の紹介や専門的知見によるアドバイス、情報提供を行います。まずはお気軽にご連絡ください。

TEL 098-996-4466

受付時間 月～金 9:00～17:00

<https://riccart.jp/contact/>



令和6年度 沖縄県障害者芸術文化活動支援事業報告書

発行 | 沖縄県障害者芸術文化活動支援センター



〒901-0335 沖縄県糸満市米須1818（アートコネクト米須コースト内）

TEL 098-996-4466 / FAX 098-996-4467

MAIL info@riccart.jp

WEB
<https://riccart.jp/>



Instagram
[@ricca.okinawa](https://www.instagram.com/ricca.okinawa)



X
[@ricca_okinawa](https://twitter.com/ricca_okinawa)



本書は沖縄県「令和6年度沖縄県障害者文化活動支援事業」の一環として制作しました

